

久保田 信¹: 和歌山県田辺湾に長期間迷入したマッコウクジラShin KUBOTA¹: A sperm whale *Physeter macrocephalus* strayed into Tanabe Bay, Wakayama Prefecture, Japan for a long time

海生哺乳類のストランディングデータベースは国内では過去20年間に整備されてきた(石川 2008; 国立科学博物館ホームページ; 日本鯨類研究所ホームページ)。紀伊半島西部海岸への鯨類の迷入・漂着については、希少例のオガワコッコウ *Kogia sima* を含め12種の過去50年分の記録をまとめた(岸田ほか 2004; 岸田・久保田 2005; 久保田 2006)。今回、その記録にはないマッコウクジラ *Physeter macrocephalus* が2009年5月に田辺湾奥に迷入した。この限定された場所へは、これまで齒鯨類に属する2種(ハナゴンドウ *Grampus griseus* と?シワハイルカ *Steno bredanensis*)の迷入の記録がある(紀伊民報 1999; 久保田ほか 2006)。しかも、今回のマッコウクジラの迷入は、座礁を免れて20日間も湾奥に滞在し、わが国ではもとより世界的にも異例の長期滞在であった(石川・荻野 2001)ので、この個体が自力で湾外へ出るまでの観察結果を報告する。

観察方法

2009年5月21-31日の期間中、毎日、昼間と夜間に短時間ずつ、本個体の姿勢、呼吸の有無、動き、特に遊泳時の回転方向や軌道について和歌山県田辺湾奥の定点で(図1, A), 数m-数10m先にいる本個体を肉眼で観察した。6月1-2日は昼間に双眼鏡を用い、和歌山県田辺湾沿岸の複数の観察場所を移動しながら、数100m先にいる本個体を、湾外へ出て姿が見えなくなるまで連続目視観察した。

結果

本個体の迷入直後から1週間の状況をまずまとめておく。2009年5月14日8時10分頃、田辺湾奥の内の浦の水深数m地点に、推定体長16m、推定体重50tほどの雄成体が一頭迷入した(図1, A)。田辺市は水産庁の鯨類座礁対処マニュアルに基づき現地対策本部を設置し、その日の夕方から翌朝には船でこの個体に接近し、放水や鉄パイプで金属音を発生させることで本個体を一時的に沖に向かわせたものの湾奥に戻った。17-18日にそこから数10mほど離れた水深5-6mの養魚いけすが設置された岸壁より本個体は移動した。19日に水産庁から派遣された支援アドバイザーの指導で4機の水중スピーカーで約40分間、警告音とクリック音を本個体に聞かせたが沖出しは成功せず、以後は対策本部は静観監視する方針をとった(田辺市の未発表データ; 紀伊民報 2009)。

2009年5月21日夕に、内の浦の干潟を水門でしきった水深数m地点(その付近より波打ち際までの海底はマガキ *Crassostrea gigas* でびっしり覆われた転石で埋められる)で、本個体はほとんど動かないまま、波打ち際の方に頭部を常に向けて座礁の様な状態であった(図1, A; 図2)。21-30日までこのような状態を続けたが、昼間、稀に瞬間的に呼吸孔のある左側を下に体を横たえたり(右側に横た

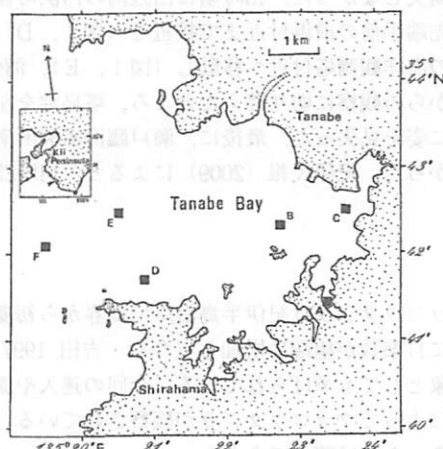


図1. 和歌山県田辺湾へ迷入してから出てゆくまでのマッコウクジラ *Physeter macrocephalus* の滞在地点の推移 (A-F)。

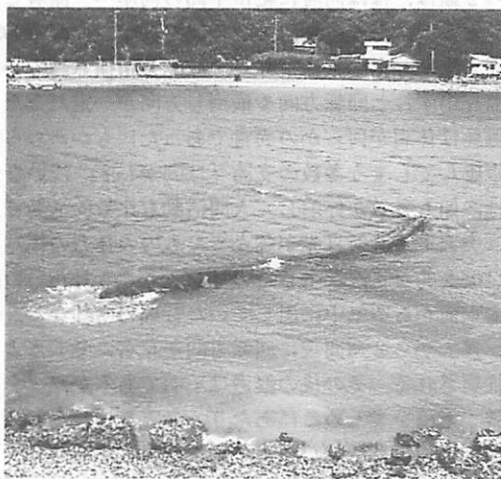


図2. 和歌山県田辺湾奥の内の浦の干潮時の波打ち際に座礁に近い状態のマッコウクジラ *Physeter macrocephalus* (2009年5月25日撮影)。

わった例はなかった), 尾鰭の一部あるいは大部分を海水面から出す行動も示した。本個体は干潮時でも尾鰭で後進でき、座礁を免れた。この期間中は毎夜、座礁地点から北西方向へわずか数10mほど自力で移動し、体の背側の半分ほどの部分を水面より空気中にわずかに出して、体長程度の長径で常に時計回りにゆっくりと呼吸しながら楕円軌道で周泳した。5月31日に姿を消し、夜間は23時30分まで1.5時間ほど田辺湾奥部を探索したが、この日に初めて居場所の確認ができなくなった(夜間に尋ねた田辺市の監視員も居場所を見失っていた)。

6月1日に前日までの長期滞在場所から北西数kmほどの神島・神楽島付近に移動したので(図1, B), 田辺市文里新港の岸壁から観察した。午前中は、体長以上の長径で時計回りに周泳し、夕方には文里港の西側の水深7-9m付近(図1, C)を、数100mの長径で周泳した。しかし、19時40分にその姿を確認できなくなった。

6月2日10時頃に行動が急変し、前日に見られた最終地点(図1, C)で初めて反時計回りに遊泳した。それより11時までに反時計回りを時計回りの5倍の頻度で行った(12回観察)。その後、湾口方向へ進み、再び神島・神楽島付近(図1, B)で、反時計回り・時計回りの両方向の楕円軌道に加え、軌道の一部ではほぼ直角に方向転換を何度も行った。11時12分から数隻の漁船やレジャーボートが本個体のすぐ傍を通過したが、双方とも衝突しなかった。13時頃に田辺湾の白浜町側へ移動したのでそちら側に観察場所を変えた。本個体は白浜半島先端手前の前浜付近まで接近し(図1, D)、北西方向に向きを転換し、13時45分頃には京都大学防災研究所の海洋観測塔付近へ移動し(図1, E)、湾外へ向かった(図1, F)。そこで、京都大学瀬戸臨海実験所北浜からの観察に切り替えたところ、塔島沖を左方(少なくとも南方)に横切る姿が観察できたものの、13時55分に姿を見失った。最後に、瀬戸臨海実験所南浜で14時40分まで観察を継続したが、再びその姿を見ることはなかった。紀伊民報(2009)によると、14時25分頃には番所鼻から西方4km沖で潜水したとある。

考 察

マッコウクジラは紀伊半島沿岸では春から初夏にかけて1年で一番多く見られ、商業捕鯨を止めてからの10年間に目撃数が極端に増加し(今原・吉田 1997; 今原ほか 1997), 紀伊半島南岸ではホエールウォッチングの対象としても挙げられている。今回の迷入や漂着があった頃、那智勝浦町沖では実際にホエールウォッチング船によってマッコウクジラが観察されている(吉岡 私信)ことから、紀伊半島沿岸への本種の集群の接近があったのは確かである。

本個体が和歌山県田辺湾奥に迷入した頃、名古屋港内に体長12m, 体重20tほどのマッコウクジラの若い雄が死亡して浮かんでいるのが発見され、死後5日前後と判定された(読売新聞社 2009; 中日新聞社 2009)。これら2頭は、ほぼ同時に紀伊半島の両岸へ“漂着した”といえるが、この原因(個体間闘争, 病気, ソナー故障, 寄生虫, 海洋汚染, 外敵の襲撃など; 加藤 1995; 荻野 2003, 2008)が同じである可能性もある。本個体が迷入当初、専門家により耳の故障を指摘されていたが(紀伊民報 2009), 今回の観察では最終日を除き、長期滞在中ずっと回転方向や横倒し方向が一定だったことから、その故障が示唆される。

本個体は体調が何らかの異常であったにもかかわらず、複雑に入り組んだ田辺湾奥へ迷入する際に、間違いなく座礁してしまう多数の支湾へは向かわず、浅いながらも死亡しないですむ内の浦に運よく入った。その付近には漁船も多数が停泊し、人間活動も比較的活発で、シャチ *Orcinus orca* などの外敵にも襲われなかった。また、炎天下で直射日光が強かったものの体力の極端な消耗が抑えられ、小川から少量の淡水の流入する岸辺で休息養分的な状況が生じたのであろう。5月28日の激しい波浪や雨天で一時的に冷涼になった事象も、特に常時海水面から空気中に出していた背部の冷却など、体力回復に貢献したと推察される。今回の行動観察の最終日、迷入から3週間後に回転方向が左右にできるようになり、移動能力が回復し、自らの力で湾外へ出られたと推察される。その後の経過は不明であるが、ソナーが正常に機能すれば生残できているであろう。

謝 辞: 本稿をまとめるにあたり、貴重な情報をお知らせ下さった福井量規氏(田辺市産業部)と本稿を査読し貴重な情報を下さった石川 創氏(日本鯨類研究所), 今原幸光氏(黒潮生物研究財団黒潮生物研究所), 荻野みちる氏(海の哺乳類情報センター), 吉岡 基教授(三重大学)に深謝致します。

引用文献

- 石川創 2008. 漂着鯨類の情報収集・蓄積と社会的活用. 沿岸海洋研究45: 85-90.
- 石川創・荻野みちる 2001. 大型鯨類のライブストランディング—その問題点と対応—. 日本海セトロジー研究11: 21-29.
- 今原幸光・吉田誠 1997. 捕鯨船乗組員による紀伊半島周辺海域での大型捕鯨の発見記録—太地捕鯨OB会々員からの聞き取り調査結果—. 和歌山県立自然博物館報(5): 21-26.
- 今原幸光・入江正己・小阪晃 1997. 紀伊半島周辺海域における大型鯨類の記録. 和歌山県立自然博物館報(5): 27-45.
- 加藤秀弘 1995. マッコウクジラの自然誌. 317pp., 平凡社, 東京.
- 紀伊民報 1999. 紀伊民報 2月25日.
- 紀伊民報 2009. 紀伊民報 5月15-17日, 21日, 6月4日.
- 岸田拓士・久保田信・小林亜玲・田名額英朋 2004. 和歌山県白浜町番所崎先端の浜に漂着したコマッコウ科鯨類について. 漂着物学会誌 2: 33-34.
- 岸田拓士・久保田信 2005. 紀伊半島に迷入・漂着する鯨類の特徴—紀伊半島の東海岸と西海岸を比較して—. 南紀生物47: 67-68.
- 国立科学博物館ホームページ. 海棲哺乳類ストランディングデータベース <http://svrsh2.kahaku.go.jp/drift/>
- 久保田信 2006. 宝の海から 白浜で出会った生き物たち. 233pp., 紀伊民報, 和歌山県田辺市.
- 久保田信・山口一夫・岸田拓士 2006. 和歌山県田辺湾に迷入したシワハイルカ(マイルカ科)と推定されるイルカの記録. くろしお(29): 19-20.
- 日本鯨類研究所ホームページ. 座礁した鯨等の情報(ストランディングレコード) <http://www.icrwhale.org/zasho.htm>
- 荻野みちる 2003. クジラはなぜ漂着するのか? 浜辺のミュージアム 漂着物考 pp.20-21, INAX 出版, 東京.
- 荻野みちる 2008. クジラの死体はかく語る. 214pp., 講談社, 東京.
- 中日新聞社 2009. 中日新聞 5月20日.
- 読売新聞社 2009. 読売新聞 5月20日.

(Received Sept. 8, 2009; accepted Nov. 6, 2009)

¹ 〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

¹ Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama-cho, Wakayama 649-2211, Japan